

私の俘虜生活

青森県 出町 成夫

私の家は大正九年四月に樺太本斗町に渡り、まもなくして日本は戦争下に入り銃後にての生計を営み、それを安住の地としておりました。

思えば昭和二十年八月十五日正午を期して日本全土に重大放送をするとあった。それは祖国日本が連合国に対して無条件降伏をした。それと同時に全世界に類なき万世一系の皇室と、紀元二千六百有年を過ぎた輝かしき歴史と、大日本帝国の国名と、古来より継承の大和魂の根元ともいう家族制度が一瞬にして破滅したと申して過言でない。又世界の歴史にも日本国の歴史にも永遠に残る一大事であった。

右の動揺のとき私は樺太沿岸特別警備隊大地大尉隊にて警備中に放送を聞きました。この任務は北緯五十度線より南下攻撃へと沿岸より上陸攻撃に備えて、在住日本人の保護を含めての任務中なれど、ソ連軍が無血上陸となったので自然解散となった。私は居住のままにして俘

虜生活と変わりました。

〈ソ連軍の上陸時の宣言の五項目〉は

一、通行には朝七時より晩は五時まで以外の通行を認めない。

二、集会は絶対に許さぬ、もしも発見次第厳罰にする。

三、刀剣銃外の武器類等を含む所持品は届出ること。

四、忘失

五、忘失

右の五項目に対して違反者は厳罰に処するとありました。

昭和二十年八月末日に本斗町地域の家族引揚船能登呂丸一五〇〇屯、船名不明汽船一二〇屯、機帆船一〇〇屯の三隻が配船となった。いずれも満載の乗船にして出港し稚内まぢかにして能登呂丸がソ連機に爆撃されて、千数百人が一挙に全員死亡と放送された。私の友人及び知人等の家族をふくむ人々が死亡したとき、敗戦は書に現わし難きくやしさと悲しさであった事は忘れることは出来ない。

ソ連軍が上陸及び進駐してから心身に深く感じた事柄

の一部について。上陸して直後十月頃の記憶にソ連発行の新生含、新聞に今は詳しい記憶はないが、あの当時の脳裏にあるのは、東京方面では今は食糧難と住宅難である。食糧については炭俵をこなしてムギ粉と混食しており、それで餓死の続出となっている。又、続いて東北方面及び北海道方面の餓死全く見兼ねる程であること。住宅については戦災のため復興もなく全く住宅難となっている。皇室の財閥についての一部も報道されてあった。

ソ連軍が進駐してまもなくして日本のスパイの暗躍があり、密告を受けた類について。私の知るのは北方に在籍のあったと思われる下士官以上の軍人、警察官、青年訓練生の指導員、大政翼賛会の幹部等を含む人々であった。

実弟三郎治は樺太上敷香郵便函第日本人十三号中隊に服役か除隊となっていたのが、突然と昭和二十二年十二月下旬の二十二時真夜ソ連兵二人がマンドリン銃を所持し、当時の寒さは身を切るようなとき兄弟が顔を見合せながらも一言も交わすことも出来ず無言にして連れ去られた。そのときの悲しさと淋しさと寒さは、身も心も裂

かれる気持ちであったのが憎んでも足りない思いであり忘れ難い。

それが昭和三十年十二月三十日舞鶴港に十年目の長い間、零下七十度の地点から奇跡の帰還となりました。抑留された地点はシベリアにあるバイカル湖につらなるイニセイ川を北極へ発動機船にて八日日夜下りましたところ、零下七十度の地点にて過ごして生還した。

私は生業に、引揚げとなる日のためにソ連名ポルトナゾル（外国船及び船泊を取扱いするところ）に本船を繋ぐ作業員と潜水夫の綱引係として稼働しておりました。私も昭和二十二年四月に本斗ゲビユウ隊に連行されたが、その翌日にソ連汽船一五〇〇屯がスクリューにワイヤーを巻きつけ航行不能で沖合に停泊中でした。沖合にての作業は危険があるので特に馴れた人でないと潜水夫が作業しないとのことか、港灣長レビンスキーさんが来隊して私を取下げてくれました。その作業は荒波に引船を横付けての難しい作業でしたが無事に終わりました。私は不思議にも一難を幸いのがれ帰宅の人となりました。

工事の発生した場所及び工事名と工事契約書作成着工並びに引渡しとなるまでの経路となった一部について着工の年月日 昭和二十三年（一九四八年）一月末日

工事発生した 旧樺太斗町港灣（新ソ連名ヨシノサハリ場所 シネベリスク市ポールト）内にて

工事名 旧樺太庁築港本斗改築工事事務所所属南

樺太（約四百屯）港灣採掘場機船

右は浸水のため沈む寸前を陸に巻揚げる工事なり

昭和二十三年一月下旬、私の勤務先（ポールトワクチヨウル）日本語にては港灣の門衛に自らはない人、港灣長レビンスキーさんが私を連れに来て、出町（カンパーニヤバイジウム）日本語にては一緒に着いてこいとのこととてついて行くと港灣長室につくと、通訳の朝鮮人二人がおりました。ソ連語から朝鮮語へ、朝鮮語から日本語へと通じる通訳。室に着くと椅子を進められたが何となく身心を締めつけられるような感じが湧いてきた。私は朝鮮語とソ連語は全く知らない中にて、ソ連語か朝鮮語へそれが日本語となるのでお互いに顔を見ながら何かあるのかと疑心を含めながらであった。レビンスキーさん

が真剣な表情で「これから私の申し上げる事は是非とも受諾してくれ」と言いました。船人間にいる南樺丸（約四百屯）が浸水寸前なので陸に巻揚げてくれ」とのことであった。私にとってはただ驚きと死に値する難問題であった。私から「レビンスキーさん首記については専門の技能と経験を有する工事であり、全く素人では出来ないから」と申し上げました「どうか他に優秀な人がいると思いますので何とぞ他に選考方を」と願いました。レビンスキーさんから「特殊工事であるので、又代金は公金を当てるので責任者をソ連人の中から種々と選考を重ねたが、その任を与える人がいないので日本人の中から選考した結果、出町と決めての頼みであるから他に変更はしない。だから絶対に受諾して下さい」と言った。レビンスキーさんから「私も工事に関して最終の責任を有しており、それ故に工事責任者に対しての人選は重視しているところから出町と見込んでの頼みである是非とも私の意を察して受諾してくれ」と頼んで来た。そして、又「出町よお前も見てわかるように船人間にてあの大きいものが沈んだなら船の出入りが出来なくなるから、今の

内に陸に揚げるより外ない状態を察してくれ」と再度の承諾を迫られた。

当時の心境は、実弟は連行を受け行方は不明、自分も連行を受け心に悩みがあり、それに全く未知な工事に着手して失敗となるは一目瞭然を引受けることは出来ない」と心に決めていた。私は海事に付いては全くの素人で、失敗の責任は（風前のともし火）消されることに疑いがないところから、床に膝を折り必死のお許しを願いましたが許していただけず、それが反対に強固に迫ってきた。それは私がゲビユウ隊に連行されたときレビンスキーさんが自ら来て（ゲビユウ隊）にて取下げてくださいであったので、どうしても承諾しなければ私からゲビユウ隊に連行させると迫ってきたときは全くの息詰まりとなった。あの室内にては無理難題を、理由の有無なくおさまくられたときは只呆然となったり、元工兵曹長代理職の池田吉蔵も密告を受け悩んでいたのが心に浮かび一日の猶子を願いましたところ許された。

池田に会い事の次第を申し上げましたところ池田も一時は頭をたれましたが、この地にては仕方ない（運を天

に任せて）と了解を得ました。そして、ソ連側に受諾することを伝達をした。ソ連側から工事上必要とするものは遠慮なく申し出るようであったので、工事上の事、又引揚げについても口頭ではなく文書にして、工事に従事する一同に見せて安心を与えて工事促進をしたいからと願いましたところ、ソ連では個人には文書の発行はしない国である。それに敗戦国民とは出来ないと断わられた。

ソ連が上陸以来口頭では何にかと約束をしていても、後日になるとしていないと断られている私は未知な工事に着手するには作業員の一致協力がなくては工事促進は望まれない、何か得心を与えて促進を計りたいと再度願った。契約書作成にソ連文二通、日本文二通作成し双方各二通所持し着工とした。参考までに港湾長別室にて工事契約書作成に同席となった役職者氏名左記のとおり

（ソ連側）

港 湾 長

レビンスキー

ネベリスク地域のゲビ ユウ（氏名不明）

ユウ隊員

南樺丸船長

シュウリコフ

(日本側)

工事請負者

出町成夫

現場責任者

池田吉蔵

潜水工事責任者

林 若松

通訳ロシア語より朝鮮

テイヘイソク

語へ

朝鮮語より日本語へ

カンヘイナ

(右記の人はロシア革命前にロシアに居住していた人)

外事務関係の人

三人 計十一人

右についてゲビユ隊員から厳しい視線で敗戦国民でありながら、又総べては指示に服従すべきが、反対に圧倒的である態度は許せないと私に迫ってきた。そのときのレビンスキーさんの助言について。「出町は全くの未知な至難な工事に着手するのでその完成を目指して、又使用人擁護の責任を有しての一念をかけての言語であるから戒めてはいけない」とゲビユ隊員をおさえてくれました。あの席にてのレビンスキーさんの助言は、異状な暗みの感じる中で全くの天祐神助を与えられたと心の

中にて両手を合わせながら誠に有り難く神仏の守護と悟り、御礼を捧げながら、又レビンスキーさんは全く良識見解を有する人格者であると尊敬をした。これは無理を承知でしたが敗戦史上にても数ない工事契約書作成でもあった。

着工中に契約書変更となった理由について申し合わせ時の内容は日本文が有利になっていたのが事実でした。工事代金はソ連では公金を当てているので国からの監査があり、日本文が有利では通過出来ないため、文書の内容を変更するから理解してくれと通訳を利用してきた。そして前文の内容はこのままに尊重するから承諾してくれと頼まれ、現文を書きかえたものを保存しているの参考までに附記します。

一、工事着上については双方とも工期を尊重するを申し合わせて着工した。

二、使用必要とする金具類諸資材の支給は工事に支障なくするをかく約束した。

三、その内容は終戦時まで日本で使用したものを当てられ、それに不足分は他から求めて支給すると約束した。

四、それから終戦時に投げ捨てられてあったものをまとめ修理及び手入れをして利用した。

五、約束の動力についてはソ連側がまとめ、兼ねて（かぐらさん）を作成して動力にした。

六、巻き揚げワイヤは地元になく他の地域を探して求めたので工期が三か月以上の日延べとなった。

船体の巻き揚げについて

船体を水切線まで引き揚げて再調査により発見したが、使用資材の不良品が禍いとなって中止し、さらに巻き揚げも失敗となった。当日ソ連側から巻き揚げの立会人が三十人位来ていた。中止と同時に作業員全員を仕度小屋に閉じ込め武装監視をつけ、私をスベリ台の先端に連れて行き、今日までに使用資材及び使用したソ連人の賃金工事代金の乱用、ソ連に対して多大な損失をかけた責任は許し難い、どのようにすると責められた。私の思いでは約束使用資材の支給もなく、又工程の遅れはソ連側にあるを知りながら、又支給の資材がなく不良品が原因を知りながら、敗戦国民と侮り戦勝国として恥ずるべき威嚇するとはと不服ながらも及ばぬ地にて仕方もなく悔し

かった。

威嚇の声を聞いた池田が仕度小屋の入口にいる武装監視を回し戸と共に押し開けて私の消息を確認に出て来たので、私が包囲の中から池田に「心配をするな」と声をかけると、池田が「出町か生きているか」と言い残して仕度小屋に戻った。

後日になって通訳から聞かされて知りましたが、あの日本人を怒らせると何にをしでかすか恐ろしい人たちである、とソ連側で言っていたそうでした。巻き揚げの当日は朝から南風が弱かったが工事を中止して十五時頃になると大時化と変わってきたので、船体保護のためソ連人の応援に岸壁打ち波で頭からずぶぬれとなったが、船体が押し波と引波に引かれ浮船となった瞬間に行詰りの我等の運命が開拓され、あのときは歓喜の血が湧きました。

私が巻き揚げをしたときと中止となったときの状況については、工事代金は予想以上に支給資材のおくれから三か月以上日延により残額はなく、巻き揚げするにも精一杯の資材をまとめて巻き揚げをしており、更に引却作

業へ諸資材の見当はなく継続の前後の策もなくしていた。

私は、もとより運を天に任せてと着工したが、使用日本人の行方を案じたが、あのとときあの地にては何の策もなく自然のなりゆきを待つばかりであった。船体の大切から中止しただけでもあの威嚇を受けたし、再度着工が出来なくなったらどのようにされるかと思うと気の遠くなる思いであった。水切線まで巻き揚げた船体を只呆然と眺めているだけだった。

右の思いに落ち込んでいたのが不思議にも南風により大時化を与えられて、右の苦境を乗り越えたとき生気に生まれ変わった。私はずぶぬれの姿で船長室（南樺丸）に登り祖国の方位に座して塩水か汗か喜びの涙か区分なく流れ落しました。そして、無事に引渡しも出来まして、我等一同も無事引き揚げて今日あると思っております。

今日に至ってもあの南風は祖国の方から北上した風であったことを思い、祖国より与えられた神風であり、又天祐神助を与えられた喜びとして永遠に記念しております。

私の体験Ⅱ樺太・シベリアⅡ

北海道 水野 力

一、転職渡樺

私は、年期を入れた雑穀商も国家総動員法によりだめになり、樺太警察官に応募することになった。昭和十四年六月警察官拝命。二か所めの散江駐在所が最後の部落放棄の悲運の地となった。私は超特級クラスの僻地が支持区域であった。

二、戦中、敗戦のどさくさの苦勞

1、昭和十九年四月、石油輸送船が潜水艦の追跡で、キトコロ沿岸で座礁。電波探知されぬよう散江郵便局から有線打電。

2、同十九年五月、海豹島が艦砲射撃を受ける。

3、昭和二十年に入ると、多来加湾に難破船の残骸、漂流物、死体の漂着。

4、漁船が砲撃を受ける。五隻、死者十六人。

5、罐詰工場跡が破壊焼失。電話線切断。

6、十六人の合同慰霊祭を八月八日、散江国民学校で